

三上晴子「欲望のコード」展

会期：2010年3月20日—6月6日

会場：山口情報芸術センター

主催：財団法人山口市文化振興財団

企画制作：山口情報芸術センター [YCAM]

キュレーター：阿部一直 (YCAM)

四方幸子

Seiko MIKAMI “Desire of Codes”

March 20–June 6, 2010

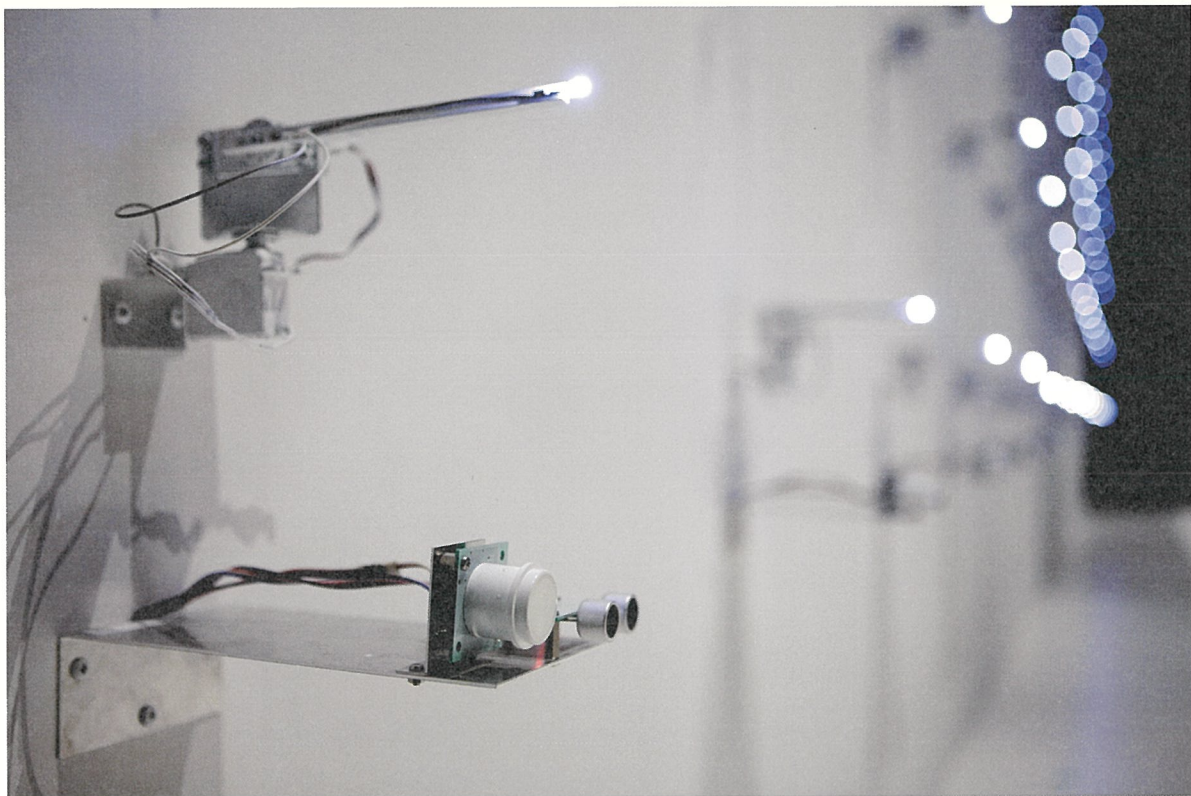
Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM)

Organized by: Yamaguchi City Foundation for Cultural Promotion

Produced by: Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM]

Curator: Kazunao Abe (YCAM)

Yukiko Shikata



薄暗く巨大な空間が、観客を待ち構えている。そこに足を踏み入れた者は、壁一面に整然と並ぶ触角のようなセンシング・デバイスに、即座に動きや顔を捕えられる。すべての「触角」が微かなモーター音とともに観客をターゲットとして向きを揃えるその様相は、不気味でさえある。

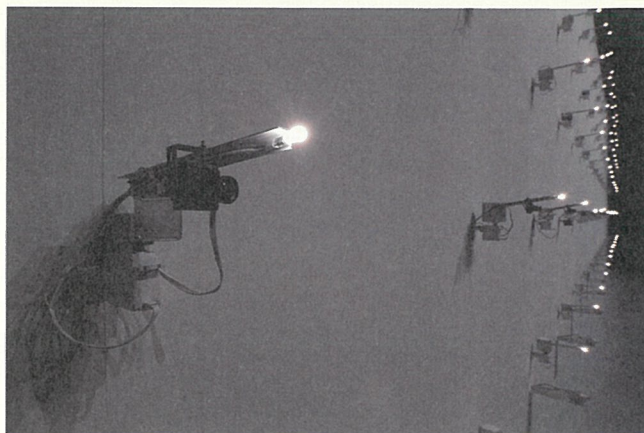
空間中央には、カメラとプロジェクターを併せもつアーム型サーチロボットが6基、天井から吊られている。ロボットは観客の動きを追跡し、足元の床にリアルタイムで本人の映像を映し出す。観客は、執拗な追跡プロセスの只中で、見られながら見る側であるという分裂的状况に置かれることになる。

空間奥の壁には、昆虫の複眼のように六角形のフレームで構成された円形スクリーンが、数十もの映像をスイッチングしつづけている。各映像は、世界各地の公共空間に設置されたウェブカムや会場の「触角」センシング・デバイスで捕えられた観客の顔などが蓄積されたデータベースから、プログラムによりたえず動的に組み合わせられ表示される。この「複眼」スクリーンは、監視の象徴としての巨大な眼に見えるが、特定の主体をもたず情報を出力しつづけるだけである。それを前にした観客は、監視される側からする側へと転換するが、めまぐるしく切り変わる膨大な映像データには自身も組み込まれているはずである。

欲望のコード—Part 1: 蠢く壁面

Desire of Codes—Part 1: 90 Wriggling Wall Units

先端にLEDをもつ触角のようなセンシング・デバイスがグリッド状に90基整列し、観客の動きに沿って瞬時に波のような動きを全体で現出させる。一部の「触角」にはカメラが装備されており、観客の顔がネットワークを通じて空間をはさんだ遠方真正面の壁にあるプロジェクション「複眼スクリーン」にあらわれる。



これら3つのシステムは、それぞれが「昆虫」を想起させる姿や動きをもち、観客の挙動を「捕獲」するものである。捕獲側（「触角センシング・デバイス」「触覚的サーチャーム」）は複数の触手で構成され、全体で波のようにうねる動きを出現させる。捕獲された情報は、複数の映像をその特性や傾向に沿って関連づけたものとして「複眼スクリーン」上で可視化される。これら3つは単独で稼働しながらも、ネットワークを介し空間全体が観客の挙動に応じてリアルタイムで連携することで、監視をめぐる一種のドラマトルギーを形成している。展覧会を訪れた者は、通常の「観客」という立場に加え、「展示物」に見られ、そのことを介して自らを展示の一部として〈見る〉という状況にさらされる。

三上はとりわけ90年代半ば以降、「知覚のインターフェイス」というテーマを作品を通して探求しつづけてきた。これまで扱われてきた視覚、聴覚、重力などのトピックは、いずれも私たちが通常自明のものとしがちな知覚の統一性・整合性を異化し分断することで、背後に潜む社会的規範までを問い直そうとする試みといえる。

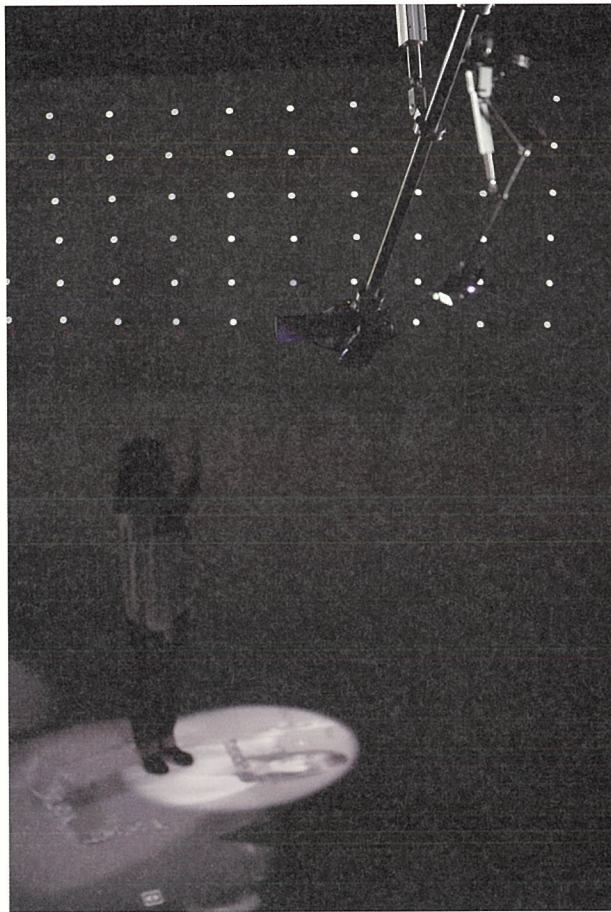
その新たな展開として、「欲望のコード」で三上が取り上げたのが監視の問題である。この展覧会では、現在日常的に行なわれている人々の行動のトラッキング、データベース化および解析、そして稼働するフィードバックの問題が、オリジナルのハードやソフトウェアを駆使した精巧かつ壮大なインスタレーションとして実現されている。ロボットと映像のみで構成された空間は、一見ミニマルな印象だが、そこでは情報を執拗に捕獲し、蓄積・処理し可視化するインタラクティブ・システムが稼働している。それにより日常的に内面化されつつある監視という問題が、かつてない知覚・身体的体験の場として提示されているのである。

三上靖子

アーティスト。80年代から情報社会と身体をテーマとした大規模なインスタレーション作品を発表。90年代に、ニューヨーク工科大学大学院留学を経て、知覚によるインターフェースを中心としたインタラクティブ・アート作品を発表。主な作品として、視線入力による作品（キャノン・アートラボ／1996）、聴覚と身体内音による作品（NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]／1997）、触覚による三次元認識の作品（ニューヨーク／1997）、重力を第6の知覚と捉えた作品（山口情報芸術センター [YCAM]／2004）などがある。また、欧米のギャラリーやミロ美術館（スペイン）、ナント美術館（フランス）などの現代美術館、トランスメディアール（ベルリン）やDEAF（ロッテルダム）をはじめとする世界各国のメディアアート・フェスティバルでも作品を発表。04年には、作品集を出版（Diputacion De Malaga、スペイン）。06年から07年まで海外研修（ベルリン芸術大学）にてドイツに滞在。現在、多摩美術大学教授。

三上は、現代のネットワーク化された監視社会における「欲望と身体」の問題を扱ったという。ここでの「欲望」とは、もはや私たち個人における「見る／視られる」ものというよりも、ネットワーク化されたシステムと接合されてしまった状態——集合的・連結的欲望——を意味するように思われる。メディア論者のヴィレム・フルッサーが1970年代に先見的に提出した「装置+オペレーター複合体」という概念を援用するなら、現代のデジタル・ネットワークは、アルゴリズムを介して膨大な情報をネットワークし、グローバルに処理・増幅することで、新たな「ネットワーク的連結体」を生み出したといえる。そこでの「欲望」は、もはや誰のものと特定できないまま、グローバルなネットワーク中にコードとして遍在し連鎖的に発動しているのではないだろうか。

「欲望のコード」では、複雑に入り組んだフィードバック・システムに観客が巻き込まれることで、各人の顔や行動データの断片が思いもよらないタイミングや組み合わせにより出力されていく。膨大なデータとして処理される人々の断片は、「ゴースト」のようにあらわれては消えていく。この空間全体が、情報ネットワーク化された「お化け屋敷」のようなものであり、ゴーストとして徘徊しているのはまさに私たちなのである。



欲望のコード—Part 2: 多視点を持った触覚的サーチアーム Desire of Codes—Part 2: 6 Multiperspective Search Arms

空間中央の天井から吊り下げられた6基のアーム型サーチロボットには、センサーとともにビデオカメラとプロジェクターが搭載されている。その下を通る観客は、カメラによって捕えられた自分の姿を、足下の複数の映像で見る——入力（撮影）と出力（プロジェクション）がリアルタイムで接続された——ことになる。

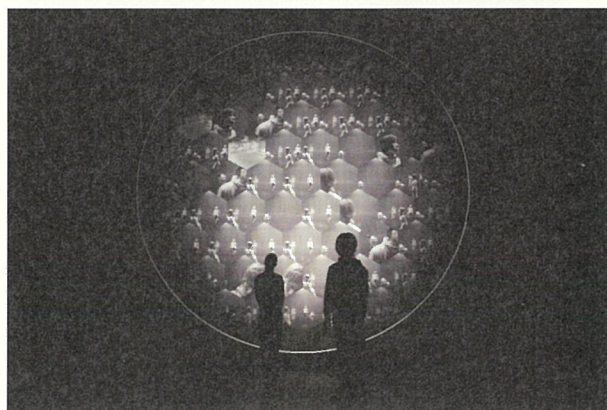
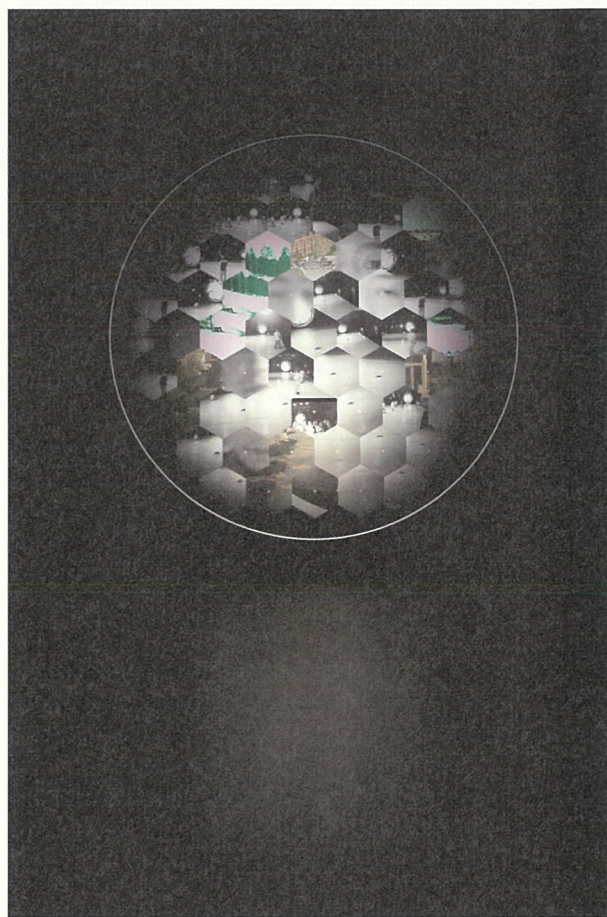
欲望のコード—Part 3: 巡視する複眼スクリーン

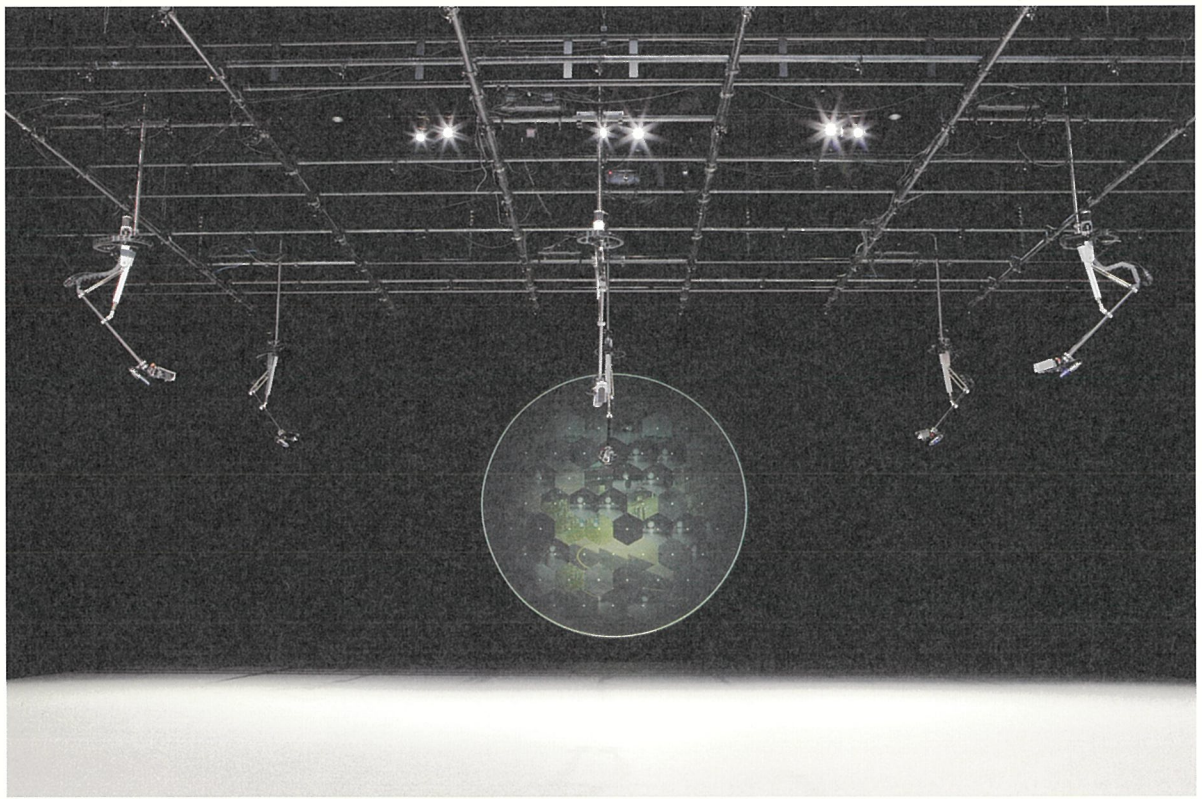
Desire of Codes—Part 3: Compound Eye Detector Screen

昆虫の複眼のように61の正六角形の映像で構成された円形プロジェクション「複眼スクリーン」では、観客の顔の映像が、過去に訪れた観客や世界各地の公共空間における監視カメラの映像などとともにデータベースとして蓄積され、アルゴリズムによってたえず新たな組み合わせとして高速にスイッチングされ表示される。

監視やデータベース化、そして欲望喚起の問題は、90年代末から00年代初頭において欧米圏において主に取り上げられてきた。そこでは「1984」(ジョージ・オーウェル)の「ビッグ・ブラザー」的支配モデルがしばしば参照されたが、2001年9月11日の同時多発テロ以降、様相は一変する。もはや支配者や敵はひとつではなく情報ネットワーク内に遍在するものとなり、セキュリティのための監視強化が人々の了解のもと急速に進行する。加えて「Web 2.0」以降の情報技術が、人々の行動をネットワーク化・管理するだけでなく、個人が日常的に情報を共有し連携する場をもたらしたことも事実である。そのような中、「プライベート／パブリック」「監視／見守り」など既存の対立項が相互浸透をはじめ、新たな欲望を生産しはじめるというかつてない事態を開いている。

私たちの欲望はすでに、センシング、ネットワーク、データベースなどが緊密に接続された状態——新たな情報生態系——において稼働しはじめている。昆虫のように微視的で膨大な数のセンシング・システムとデータベース化および情報接合を通して三上が扱っているのは、まさに現代に出現した新たな欲望のコードである。そこでの自己は、世界を分節していく主体的存在というよりも、むしろ昆虫の群れのようなボトムアップかつネットワーク化されたプロセスとしてある。そして世界は、視覚的对象化というより、触覚的な関係性によって浮上するものであるだろう。これまで個人の知覚を分断することで統一的身体性の異化を試みてきた三上は、「欲望のコード」において、個人を超えてネットワーク化された身体性や知覚を含む「欲望」の様態へと拡張したのである。





「欲望のコード」では、監視の主体と対象の攪乱がさまざまなレベルで喚起される。観客は、監視の対象であり主体を引き受けるだけでなく、それらが同時に生起する場に立ち会うことになる。また空間やシステム自体に、主客体の対立項を逸脱していく潜在的な「ヴォイド」——肉眼および情報レベルで不可視的な時間・空間的な局所——が埋め込まれている。センシング・ゾーンの境界は、観客の動きを追跡するデバイスの稼働によって常に変動しつづける。カメラも、タイミングや動きによっては会場内のデバイスや映像を捕えたり相互に撮影しはじめることで、複雑化した入れ子状の情報の入出力を起こしさえする。このように三上は、空間・システム自体に一種の隙や制御不可能性を残しておくことで、監視と欲望のフィードバック・ループから逸脱しうる可能性を示唆している。それをいかに発見し活用するかは、それぞれの観客に委ねられている。

* 本稿は、山口情報芸術センターのために執筆されたものをベースとする。

撮影：丸尾隆一 (YCAM)

写真提供：山口情報芸術センター [YCAM]

photo: Ryuichi Maruo (YCAM)

Courtesy by Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM]